年間第１１主日

第一朗読　出エジプト 19・2-6a
第二朗読　ローマ 5・6-11
福音朗読　マタイ 9・36～10・8

2026.6.14
カトリック高円寺教会　9：30
主任司祭　高木健次神父

わたしたちは、毎週このお御堂に集まってごミサをお捧げしておりますけれども、天国に行った後もごミサというのはあるんでしょうか。

実際に行ってきたわけではないので、本当のところは言えないですけれど、ただ聖書を手がかりに考えるならば、天国に行った後にはごミサはないんだと言っても良いような気がします。そのヒントは何かと言えば、旧約聖書で、ソロモン王が神の民の中心に神様を思い起こす神殿を建てますね。最初の神殿。そして神殿が完成した後にそこで最初の祭儀を行う。でもその最中に、その神殿の中には神の栄光が満ちたので、もはや儀式を続けることができなかったという文が出てくるんです（歴代誌下５章）。

神様の栄光――神の栄光についてここでは詳しくは展開できないんですけど――、でも神様の栄光が満ちるならば祭儀は続けられないんだ。なぜならば、もう神様全体がそこにいらっしゃるから。そういう意味では、わたしたちが毎週毎週こちらで祭儀を執り行っているということは、一つには神様の栄光がまだ完全には満ちていないことを表していると同時に、その神様の栄光が満ちるのを待ち望んでいる。そういう状態ですね。満ちていないっていうだけだったら、神様と切り離された状態。だけど、それを待ち望むというのがミサなので、神様がすべてを完成してくださるときには、人間が執り行う典礼ということはもはや必要なくなると考えても矛盾しないですね。

では、神様の栄光が満ちるとはどういうことかというのは、特別なすごい神々しいことが起こるとかということよりは、神様がお考えになってお造りになった世界が、わたしたちがいつも「主の祈り」で祈っている通り、「みこころが天に行われる通り、地にも行われる」という状態になることだし、もっと身近なことを言えば、わたしたち一人ひとりが、神様がお造りになったわたしたちになっていく。つまりは、自分のことばっかり考えているっていう自分から、イエス様のように他の人を生かすための存在になるっていう、そのことが、宗教的な荘厳な言いでは「神の栄光が満る」って

いうことだけど、身近な言い方をすれば、自分たちのことばっかりを考えてるわたしたちから他の人を生かすわたしたちに変えられるっていうこと。自分たちは、この祭儀を行うということは、まだそのゴールには到達していないけども、神様が迎えに来てくれてそこに一緒に歩んでいるその途中なんだ。それが福音ということになるわけです。飼い主のいない羊のように行き先が分からなくてそこにたむろすのではなく、導かれて、方向性を指し示しされて、そこに向かっているのだということそのものが、わたしたちがここでミサを行っている理由です。

悪霊はその歩みを妨げようとする。一つには、自分自身は変わることができないんだと。他の人の生かす存在、他の人のためにっていう心を持った人もいるかもしれないが、自分はそういう人間ではないから自分は変わることができないっていう、自分がどうなのかっていうことにこだわる。イエス様、神様の呼びかけが実現するっていうことに信頼するのではなくて、自分はその歩みに出発できないんだというふうに思わせてしまうのが一つ。

そしてもう一つは、典礼を通して――あるいはカトリック的に言うならば秘跡を通して――神様に繋がったので、自分たちはもう目的地に着いたのだということです。あるいは恵みっていうのは神様が一方的に与えられるものだから、わたしたちがすることは何にもない。変わる必要はない。ここが目的地なんだ――場合によっては、ここが天国なんだっていう――それが悪霊です。なぜならば、典礼を行っているということは、まだ天国には到着していないことの一つのしるしなんだ。だけど、そこに向かっている希望。そこから外れてしまうと、もはや自分たちが目的地に着いたのだと言うならば、わたしたちはそこに向かうっていう方向性を一方で見失う。自分たちがどこに向かって、あるいはどんな恵みを必要としているのかということを考える必要がない、今のままっていうことになるわけです。

でも、本来ならば、今のままの自分の生活のパターンの中に留まり、そしてそこで楽しい心地良いことは何かっていうことを基準に判断するためだけならば、わたしたちは信仰の恵みは必要ないわけです。あるいは神様の呼びかけがなくてもそのことはいつでもやっているということですけども、そうではない。そこから一歩先に、神様のもとに、そして神様がお造りになった自分自身を、自分の力というよりは、そのわたしたちを造られたのが神ご自身で、そして神様はわたしたちを他の人をお互いに生かし合うようにご計画されたんだ、というところに希望と信頼を置くというのが信仰

だし、それは神様の力によって実現しつつあるっていうのが福音ということになります。

そういう意味では、今日イエス様のもとから派遣されていく使徒たちと、そして使徒たちを迎え入れる相手の色々な思い患いや困難に直面してる人たちというのを、二種類の人間として分けることはできない。神様のもとに、主の栄光が満ちるようにそこに向かって歩んでいる者こそが神を指し示しすし、わたしたちは神に向かって歩んでいると同時に他の人をその歩みに招くっていう存在でもあるということなんだと思います。

わたしたちが今まだ目的地に到着していないということが、絶望とか無力感に通じるものではなく、むしろ、目的地に向かってイエス様が迎えに来て共に歩んでいるんだということの中に希望を置き、その目的地とは遠い場所に行くとか非日常的なことではなくて、わたしたち自身が自分のことばっかり考えることから変えられていく歩みなんだということを率直に認めつつ、自分の力では不可能なんだけど、でもイエス様との繋がりを深め、イエス様に委ねるということの中で少しずつ、神様の栄光を神様ご自身がわたしたちの中に満たしてくださるのだという希望を持ちながら、今日も一人ひとりの中に――まだその栄光が完全に満ちていない一人ひとりの中に――神の栄光そのものである、悪霊に打ち勝つ力であり権威であるイエス様を一人ひとりの中にお迎えし、わたしたちが少しでも互いを生かす者になっていくように、その希望を新たにしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/